

とい XXXIII 2013

目次

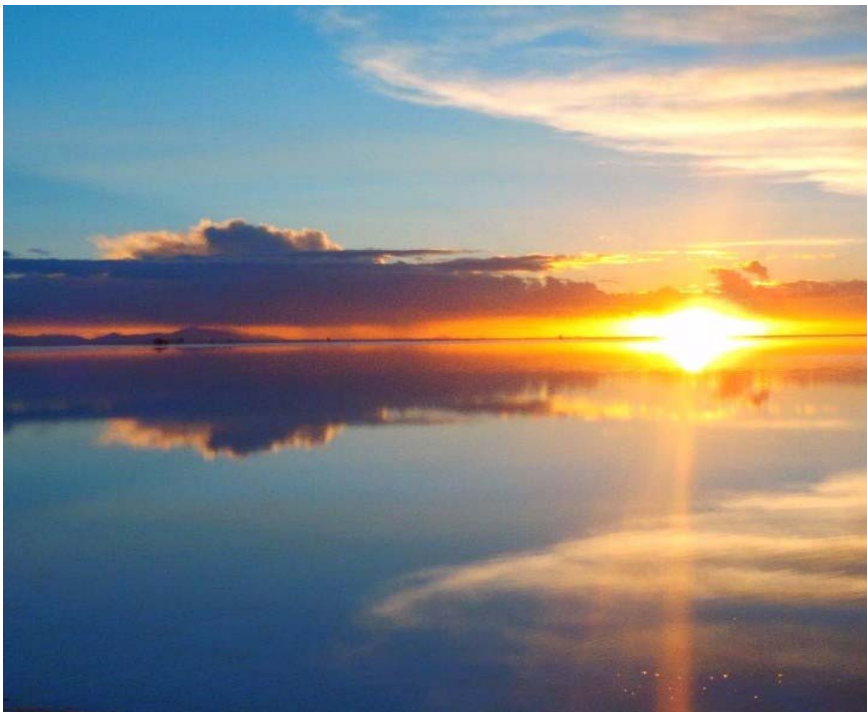
『とい』の小畑 ー追悼小畑精和ー……………松崎一平…2

☆詩を読む★ サンドルを響かせて ーフィーリクス・ランダルの旅立ち……………楠瀬健昭…6

日本警察小史……………松尾庄一…12

国際人嘉納治五郎と揮毫に見る人生観……………和田孫博…16

編集後記



『とい』の小畑

—追悼小畑精和—

松崎一平

昨年(2014年)の11月22日、『とい』の長年の同人であった小畑精和が、二年にわたる闘病生活のすえに亡くなった。悲しい。残念でならない。

小畑から届いた最後のeメールは、わたしが添付ファイルで献呈した「叙事詩の冥府行」(*Vestigia Cordis*、第3号、アウグスティヌス研究会編、2013年、所収)という短いエッセイに対するもので、昨年7月15日付け、内容は以下のとおり。

松崎一平さま、

ご高論、拝受いたしました。

旺盛な研究心、執筆意欲に感心いたします。

「オデュッセイア」から「神曲」まで、もちろん貴兄の主たる関心は「告白」なのでしょうが、壮大なスケールの論文だと拝察いたします。

「一人称」と「三人称」の語り、興味がひかれます。楽しみに読ませていただきます。

当方、一昨年に下咽頭に腫瘍がみつかったから、入退院を繰り返しております。今年はサバチカルで授業は休ませてもらっております。しかし、何とか生きながらえております。あと少し書き残したいものもあります。

貴兄に見習い、何とか形にできればと思っております。

まずはお礼まで。

読むとすぐに、わたしは返信した。

松崎です。

返信していただき、ありがとうございます。

なお闘病中とのこと、こころよりお見舞い申し上げます。御快癒されることを、またお仕事が無事成し遂げられることを、お祈りいたします。

昨今、自分の無力を実感することが多いです。そのようなとき、人間にとっての「祈り」というもののかけがえのなさを実感します。

どうぞ、生き抜いてくださいますよう、こころよりお祈り申し上げます。

小畑は、1972年4月に京都大学文学部に入学し、教養部で『とい』の同人の大半と同じ

クラスに属した、いわゆるクラスメートである。ただし他の同人が教養部時代からの遊び仲間でもあったのにたいし、小畑は『とい』をほぼ唯一の場として交流してきた。『とい』創刊のころ（1981年9月）、たまたま小畑は、千葉真也が勤務していた短期大学で非常勤講師をしていて、編集の中心にいた千葉をとおして『とい』の創刊を知り、第2号（1982年9月刊）に「虚構の崩壊」を投稿した。その後、明治大学に勤務するようになって東京に移り、『とい』を支援する意図で同人となり、第5号（1985年）から第11号（1991年）まで、ほぼ毎号、時事的な批評的エッセイや翻訳を掲載した。以下のとおり、全部で9編になる。

「虚構の崩壊」、第2号（1982）、pp. 1-8

「エセ・佐川一政」、第5号（1985）、pp. 34-39

「戯れの名称学—アノミー状況と対峙して—」、第6号（1986）、pp. 11-17

「『プラトーン』を観て—オナニズムを越えるために—」、第7号（1987）、pp. 21-24

「人を食った「話し」」、第8号（1988）、pp. 7-16

「若者よ、君はもう男になったか?」、第10号（1990）、pp. 28-30

（翻訳）ネゴヴァン・ラジッチ、「モグラ男（一）」、第11号（1991）、pp. 1-14

（翻訳）アンヌ・エベール、「急流」、第14号（1994）、pp. 56-83

「「私」と「小説」—『白き処女地』のことなど—」、第16号（1996）、pp. 32-34

「虚構の崩壊」は、小説論である。小畑によると、小説の作者は世界（現実）を理解し（読み）、それを単純化したり、ある点を誇張したりして、小説のなかに再構築し、いわば図式化していく。小説は、再構成され図式化された虚構の世界であり、本来的に恣意的である。「八〇年代の現在」、世界の読み方は、あいかわらず一九世紀生まれの、写実主義（「現実社会の問題や意味を知的に究明し、またそうしうとする主知的人間中心的世界観」と説明されている）、マルクス主義、精神分析によっており、硬直している。そのために、本来「特異性を特徴とし、日常的なものを活性化させる」芸術性を担うべき虚構が「平均化され、一般化され」、その本来の役割を果たせなくなっている、と小畑はいい、まさに1982年に生じた女子銀行員によるオンライン詐欺事件を取りあげ、それを題材にした小説やテレビドラマの読み方に、その実例を指摘する。ようするに、小説にかぎらず、わたしたちが現実を読みとるときにも、特定のパターンに従いがちだというのである。そのパターンを、小畑は「物語性」と呼ぶ。「物語とは既存の構造に従って作られて」おり、「この既存の構造＝物語性は本来虚構であるのだが、一般化して自然なものとなっている」という。論文の終結部にいう。

ところが、現実を見直し新たな意味を探ろうとするとき、物語性はわれわれの目をくもらせることがある。それはむしろ邪魔になるのである。そして、刻々と変化する現実

に対応しきれなくなると、物語性は自然なものとは感じられなくなり崩壊するのである。

現代が現実先行の時代であることは多くの人が認めるところだろう。先行する現実を
把え、物語性を再構築することはもはや不可能なのだろうか。

小畑は、1980年代を、「物語性」が生命力を失い、現実コミットできなくなった時代だとする。小説もまた、かつて（19世紀に）有した力を喪失している。だが小畑は、文学の将来を達観する。以下のように論文を結ぶ。

文学がもし何か為し得るとするならば、まさにこの面においてではないだろうか。文学は物語性を破壊しながら絶えず新しい物語性を目指してきたのだから。

ロブ＝グリエ研究で培われた文学理論と現実社会への鋭利な視線とに支えられた、小畑の持ち味というべき理知的で即物的な表現が、若き日、すでにして印象的である。

「虚構の崩壊」につづいて『とい』に掲載されたどの作品も、ジャンルは違っても基本的に、「物語性を破壊しながら絶えず新しい物語性」をめざす実践だったといっている。小畑の目指すところは、若き日にすでに明確に定まっていた。それは、世界の新しい読み方、新しい物語性を、現実を権威や伝統から自由に把握しようとする不断の実践をとおして構築することにほかならなかった。若い国家であるカナダで生まれたフランス文学への深い関心の出所も、ここにある。季刊『千年紀文学』に書き続けた多くのエッセイも同様である。小畑にとって、それこそが現実とコミットすること、生きることにほかならなかった。

このように、小畑の文学観・小説観は、あくまでも健康で、肯定的・楽観的である（小畑がのちに明治大学ラグビー部部長を引き受けたことは、わたしには自然なことのように思われる）。わたしは『とい』で理解できた小畑の文学観を好ましく思いつつ、『千年紀文学』に掲載されるエッセイや送ってくれる様々な著作を読んできた。

15年ほどまえ、上京中に、明大前の沖縄料理店でひらかれた小畑ゼミのコンパに誘われたことがある。たまたま小畑の誕生日で、最後に学生たちからバースデー・ケーキが送られた。小畑が、学生たちとほとんど同世代であるかのように気さくに学生たちに接し、学生たちも小畑を慕う姿を目の当たりにしたものだ。

そのおり、「小説が書きたいんや」と、小畑は関西なまりでいった。それ以後、節目ごとのメールのやりとりのなかで、「小説が書きたい」という心底からの望みを、小畑はなんだか語った。新たな物語性を手にしようとしていたのかもしれない。じっさい、『とい』の最後の作品となった、「私」と「小説」—『白き処女地』のことなど—という短いエッセイを、自分は有言実行が好きだといったうえで、以下のように結んでいる。

わたしはぐうたらである。束縛されるのは大嫌いである。しかし何もしないとやはり落ちつかない。「有言」は私にとって、「押しつけだ」という言い訳の効かない、自由という名の束縛なのである。

わたしは小説を書こうとしている。

これは 20 年近くまえの決意である。小畑が、その後じっさいに小説を書いたのか、わたしは知らない。世界を理知的に過ぎるしかたで読み、世界の骨組みを透視し、的確に、しかしいつもユーモアを忘れずに批判することにたけた小畑が、曖昧で不透明なものをかかえこまざるをえず、ときに多義性と象徴性を必要とする小説を、どのように組み立てどのような文体で肉付けするのか、考えるだに興味はつきない。その興味は満たされることができなくなった。残念だ。小畑にとっては無念きわまりないことだったにちがいない。

『とい』というみすばらしい小舟に、心底からの作品を 9 編も託してくれた亡き小畑に、こころより感謝する。

(2014 年 5 月)

☆詩を読む☆

サンダルを響かせて

—フィーリクス・ランダルの旅立ち—

楠瀬健昭

1. はじめに

1880年4月21日、Liverpool、Birchfield 通り 17 番、Felix Spencer という名の 31 歳の蹄鉄工が、2 年余りの闘病の末、肺結核で亡くなっている。G. M. Hopkins は、1 週間後の 4 月 28 日に、Spencer を Randal という名に変え、血気盛んであった若者を追悼するソネットを書くが、それは哀歌というよりも頌徳の詩であり、この世を旅立つランドルへの、はなむけの言葉であると言える。‘Felix Randal’ は、司祭詩人ホプキンズが神の栄光を讃えるブライト・ソネット群と、神の不在を嘆くダーク・ソネット群との間に位置するものである。このソネットに満ち溢れる幸福感は詩人のものでもある。オクスフォードからリバプールに赴任する間の 3 か月間、代理司祭として過ごした Bedford Leigh での体験から得られたものである。ホプキンズは人々に歓迎され、教会での説教も好評であった。

Felix Randal

FELIX RANDAL the farrier, O he is dead then? my duty all ended,
Who have watched his mould of man, big-boned and hardy-handsome
Pining, pining, till time when reason rambled in it and some
Fatal four disorders, fleshed there, all contended?

Sickness broke him. Impatient he cursed at first, but mended
Being anointed and all; though a heavenlier heart began some
Months earlier, since I had our sweet reprieve and ransom
Tendered to him. Ah well, God rest him all road ever he offended!

This seeing the sick endears them to us, us too it endears.
My tongue had taught thee comfort, touch had quenched thy tears,
Thy tears that touched my heart, child, Felix, poor Felix Randal;

How far from then forethought of, all thy more boisterous years,
When thou at the random grim forge, powerful amidst peers,
Didst fettle for the great grey drayhorse his bright and battering sandal!

フィーリクス・ランダ

装蹄師フィーリクス・ランダ、ああ、それでは、あの者は亡くなったのか。わたしの務めは、すっかり終わったのか。骨太で、頑丈、美しい造りをした、あの者が、やせ衰え、やつれ、ついに、からだの中で理性がぶらつき、おおよそ四つ、不治のやまいが、あの者のからだに巣くい、相争うのを見守ってきたのは、誰かと言えば、ほかならぬ、このわたしなのに。

病魔があを打ちのめした。はじめは耐えきれず悪態をついたが、終油の秘跡を施され、とかなんとか立ち直った。もつとも、数ヶ月前から、よりやすらかな気持にはなり始めていた、わたしたちの清らかな救いとあがないを、わたしが与えていたから。とまれ、あの者の霊を、神よ、休ませたまえ、どんなふうであれ、あやまちを犯した、あの者を許したまえ。

このように病者を見舞うことで、わたしたちは病者をいとしく思うようになり、病者もわたしたちをいとしく思うようになるものだ。わたしの言の葉は汝にやすらぎを教え、ふれあいが汝の涙をいやしていた、汝の涙はわたしの胸に響いた。わが子よ、フィーリクス、あわれなフィーリクス・ランダよ。

とても、こんなふうになるとは、そのときは思われてはいなかっただろう、汝がもっとあらくれであったときには。そうしたときには、ふぞろいで不屈の鍛冶場の仲間うちで、ひときわたくましい汝は、大きな葦毛の輓馬に、ぴかぴかのぱっかぱっかと響くサンダルをととのえていたからだ。

2. ランダルとサンダル

ランダを火と鍛冶仕事の神ウルカヌスのイメージで捉えている批評家もいる。ギリシャ神話におけるヘーパイストスは、神々の天馬に真鍮の蹄鉄を打ち、ヘルメースの翼あるヘルメットとサンダルもデザインした。こういう連想は禁じ得ないとしても、このソネットは、いわゆる *priestly poems* のひとつであり、聖職余滴とも言われる。

1879年11月23日、ベッドフォード・リーでの説教の中で、ホプキンズがキリストについて、*‘Thou art beautiful in mould above the sons of men’* (詩篇 45, 24) を引用し、*‘In his body he was most beautiful...moderately tall, well built and tender in frame’* であると語っているのを聞くと、むしろ、なぜかランダはキリストと重なって見えてくる。病者となったランダが塗油を受けたと同様に、その意味合いは違っても、キリストも塗油される(ヨハネ 12, 3)。キリストはメシア、すなわち塗油された人 *Christos* でもある。ランダが鍛える馬蹄形は、ギリシャ文字オメガの大文字と同じ形状であり、「我はアルパなり、オメガなり」(黙示録 1, 8) のキリストと符合するとも考えられる。また、ヨハネの見たキリストの姿は、「その足は炉にて焼きたる輝ける真鍮の如く」(黙示録 1, 15) とある。炉で精錬された蹄鉄は、あたかも受難を経験した

キリストの真鍮のごとき足であり、敵を足下に踏み砕くキリストの足のようなものである。音をたてて輝くサンダルは、キリストの足をも連想させるように思える。

サンダルを響かせているのは、輓馬であるが、祝福され旅立つランダルでもある。ソネット最後の三行連句に至り、わたしはそう感じている。つまりこのソネット全体を引き締め、まとめているのは、冒頭と末尾にある、Randal と sandal という韻を踏む語である。サンダルは一義的には、ランダルが鍛え、輓馬に履かせる蹄鉄である。ローマ帝国の昔、馬の蹄を保護するものは、hipposandal (soleae ferreae)であったため、sandal が蹄鉄であることは、突飛な表現であるとはいえない。Randal は、時系列で見ると random, rambled, ransom、と音の変化を楽しみながら、sandal へと変化している。サンダルは古代ギリシャ・ローマの人々が利用していた履物であることから、ランダルはあたかも古代ギリシャ・ローマ人になった如くに、さらにローマ軍兵士の如く馬上の人となり、さっそうとこの世を旅立ち、疾駆するようにも思える。Randal は古英語 Randwulf に由来する短縮語であり、その意味は rand “shield” + wulf “wolf” である。Beowulf が文字どおりには ‘bee-wolf, a wolf to bees’ 「ミツバチの敵」つまり熊であるならば、Randal は ‘shield-wolf, a wolf to shield’ 「盾の敵」つまり槍であると類推できる。ローマ兵が持つ槍を思わせる。

しかし、ランダルはサンダルへと変化したのであれば、やはりランダルは蹄鉄となり、輓馬の蹄と足、ひいては輓馬そのものを守る存在である。ランダルの仕事 farrier は、ただ単に鉄を鍛え、蹄鉄を馬に履かせるだけではない。馬の蹄、脚の状態を見極め、ひいてはその馬の健康状態を見極め、手当てすることもあると想像される。装蹄師は blacksmith であり、veterinarian でもある。すると、ランダルは死してなお、輓馬の脚を守る存在であり、司祭詩人ホプキンズと同じく、癒す側にも属する。古代エジプトの司祭もパピルスでできたサンダルを履いていたらしい。第一三行連句にあるように、司祭ホプキンズは病の床に伏していた教区民ランダルを見舞い、心を癒していたが、同時に癒されてもいた。慰めることによって、かえって慰められる。励ますことによって、かえって励まされる。ランダルはそういう関係性から、癒される側から癒す存在にもなったが、装蹄師であり馬医であることから、もともと癒す存在でもあった。

いかなる仕事であれ、その務めを果たすものは、神に栄光をもたらすが、ランダルの仕事は、ホプキンズがその例として最初に挙げているものである。ランダルが祝福されないはずはない。また、詩人は装蹄師を Felix (happy) と名付け、用意周到に、その名を冒頭で明かすことによって、フィーリクスの死は祝福されるべきものだ、ということを知らせている。フィーリクスは夭折といえるかもしれないけれど、立派に務めは果たしていた。

3. 教区司祭と教区民

「ああ、それでは、あの者は亡くなったのか」という言葉は、司祭がフィーリクスの死を伝え聞いたことを示すとともに、フィーリクスの死との距離感を表わす。また、「わたしの務めは、すっかり終わったのか」という、もうひとつの同じように眩きとも落胆とも取れる言葉にも、詩人のフィーリクスの死に対する冷静な受け止め方を感じる。フィーリクスは亡くなり、教区司祭

としての自らの務めは終わったと語りながら、同時に疑問形で表現することで、このソネットにおいて、詩人が解決すべきテーマ、「あの者は亡くなったのか」、「わたしの務めは、すっかり終わったのか」をここで提示していることになる。

それだけではなく、オクテブ前半において、詩人は、はやくもランダルの病状を説明するのに巧みである。肺結核の特徴をあざやかに表現しているように見える。ヒポクラテスの「流行病」第一巻第二節に「実に肺癆は多数の人々を死亡させたのであって、この点で当時起こった病気のうち唯一かつ最強のものであった」とあるように、肺結核はおそらく 19 世紀にあっても不治の病と言えた。また、たとえ骨太で頑丈であったにせよ、「肺癆になりやすい体質の人々」もいたらしい。ヒポクラテスにある「患者はすみやかに憔悴し悪化し、…そして死期が近づくと、多くのものがうわごとを言うようになる」ことは、この詩の「あの者が、やせ衰え、やつれ、ついにはからだの中で理性がぶらつき」という描写と見事に一致する。また、「おおよそ四つの不治のやまい」とは、ヒポクラテスに探せば、「悪寒をともなう熱」、「発汗」、「腸の不調と疼痛」、「少量で濃厚な尿」、「煮熟した痰」、「咽喉の痛みと炎症」などの症状を述べていると思われる。たとえば「熱は完全にひいてしまうことがない」、「痰は吐きどおし」であるため、いずれも「からだに巣くい」命にかかわる症状であるといえる。これらの症状が「相争う」、つまり症状が悪化していくことで、次第にそしてすみやかに死期へと近づく。このようにホプキンズによるランダルの病の描写は簡にして要を得る。

オクテブ後半では、詩人は「わたしの務め」を語る。ランダルを見守ってきた様子を聞くことによって、病に倒れ、死すべき運命にある教区民に対しての、教区司祭の務めがどのようなものであるか、わたしたちは知ることになる。

ホプキンズの‘On Death’によれば、Methuselah は 969 年生き、預言者 Enoch と Elias は、今も生きてはいるが、「死は確実に訪れる」わけで、「いつ、どこで死が訪れるかはわからないが」、「われわれはこの肉体において死すべき運命にある。」「死はたいてい不治の病のうえに訪れ、不治の病には必ず苦痛が伴う」うえに、「死はすべてをわれわれから奪い、われわれには「死後どうなるのか」という恐れもある。」また、死は突然訪れ、人は罪を犯したまま逝くこともある。

こうした、人間の死に対する恐れに対して、神は the last sacraments、the grace of contrition、holy hope を与えてくれる、とホプキンズは語る。最後の秘跡とは、Penance、Extreme Unction、Holy Communion を指すが、「受難と死によってキリストは人間の罪を贖い、そのため人間は救われる」ことから、このソネットの中で、sweet reprieve and ransom は、聖体拝領のことである。もちろん、「清らかな救いとあがない」を得るには、罪の告白とゆるしが必要である。罪を痛悔すること、司祭への告白、償いを果たす決意のことで、神から罪のゆるしが与えられるものである。終油、または病者の塗油、ホプキンズは Holy Oil とも言うが、それは死を迎えるためだけではなく、むしろ病気から立ち直らせ命を救うためのものである。死の苦しみと靈性を脅かすものに立ち向かう力を与えてくれるものである。詩人は、anointed と一語でこれを表現する。司祭のもとで、ランダルは幸いにして最後の秘跡に与ったことが簡潔に描写されている。

なお、3つの秘跡に与れない場合に、ホプキンズは痛悔を勧める。神のために悔い改めること

が真の痛悔である。「できることならば、十字架をベッドの前に掲げ、十字架の方を見ながら、まさに命果てようとする救世主に祈りなさい、死の床にあるあなたを見てくださるように」と、救われる方法を具体的に教えてくれる。痛悔もなされなかったとしても、神に救いを求めて、希望をもって祈り続けなさい、とホプキンズは説いている。希望は天に投げられた錨であり、これを離さなければ迷うことはない、「この希望はわれらの^{のぞみ}霊魂^{たましい}の錨のごとく安全にして動かず、かつ^{まく}幔の内に入る」(ヘブル書 6, 19)に基づいて語る。

オクテブ前半において司祭が見守ったのは、mould of man である。mould は ‘earth as the substance of the human body’ でもあり、「われわれはこの肉体において死すべき運命にある」ことが感じられるが、オクテブ全体を聞けば、‘heavenlier heart’ を持つことができ、肉体は滅びても、魂は救われ、heavenly=connected with heaven であることから、復活により、「我ら土に属するものの形を有てのごとく、天に属する者の形をも有つ」(コリント 15, 49)ことも予感する。

ただ、ここでわたしたちは、ホプキンズとランダルとの遠い距離感を感じる。見かけ上は超然とした態度を取っていたとしても、この態度こそが、ランダルの死とそのことが意味するすべてを、痛切に、そして個人的にも司祭が感じていることの結果であるとも言えるが、教区司祭にとって教区民の死を看取することは、司祭の務めに過ぎないようにも見える。それは、I と he という、それぞれを表す代名詞の使い方に端的に現れる。少なくともランダルの死は教区民の多くの死の一つに過ぎないのではないかという思いが生まれても不思議はない。

そうした疑念を晴らすように、詩人はオクテブの会話体から変化をもとめ、セステット前半において、一転あざやかに、弱強調の詩的リズムを刻み、交錯配列法を使いながら、癒す者と病者との関係を us と them という代名詞を用いて一般化しながら、司祭の行いが一方通行的なものではないことを強調する。さらに、thee, thy と親称を用いて、今は亡きランダルに語りかけることで、ふたりの関係が形式的なものではないことを語る。司祭の行いが、司祭の務めゆえのものではなく、教区民のためにあることはもちろん、司祭と教区民のふれあいによって、お互いの魂が高められることも、また感じられる。

一気にふたりの距離を縮めた詩人は、セステット後半に至り、「とても、こんなふうになるとは、汝がもっとあらくれであったときには思われてはいなかっただろう」と、ランダル栄光の時代に戻り、活力あふれるランダルとの対比で、ランダルの死と死に至る状況を、いっそう悲劇的なものに仕立てようとする。しかし、ランダルとその仕事ぶりを賛美する声を聴きながら、この詩に耳を傾ける者は、いつの間にか、神に祝福され、蹄鉄の響き高らかに、この世を旅立つランダルの姿をも思い浮かべることになる。ランダルは確かに亡くなったが復活し、教区民に対する司祭の務めというものは、ランダルがいなくなっても終わりではない。

(2014年5月29日)

《参考文献》

ヒポクラテス『「古い医術について」他八篇』小川政恭訳、岩波文庫、1963.

『文語新約聖書』岩波文庫、2014.

安田章一郎「ホプキンス詩における曖昧について」Nondum 第7号、1993.

Cotter, James Finn. *Inscape, The Christology and Poetry of Gerard Manley Hopkins*. University of Pittsburgh Press, 1972.

Crystal, David. *The Cambridge Encyclopedia of the English Dictionary*. Cambridge University Press, 1995.

Devlin, Christopher, S.J. ed. *The Devlin and Devotional Writings of Gerard Manley Hopkins*. Oxford University Press, 1959.

Ellis, Virginia Ridley. *Gerard Manley Hopkins and the Language of Mystery*. University of Missouri Press, 1991.

MacKenzie, Norman H. *A Reader's Guide to Gerard Manley Hopkins*. Thames and Hudson, 1981.

McChesney, Donald. *A Hopkins Commentary, An Explanatory Commentary on the Main Poems, 1876-89*. University of London Press, 1968.

Saville, Julia F. *A Queer Chivalry, The Homoerotic Asceticism of Gerard Manley Hopkins*. University Press of Virginia, 2000.

Thornton, R.K.R., and Phillips, Catherine, ed. *The Collected Works of Gerard Manley Hopkins. Vol. I. Correspondence 1852-1881*. Oxford University Press, 2013.

(‘Felix Randal’ のテキストは『ホプキンス詩集』第4版による。「フィーリクス・ランダール」は拙訳である。本稿は、2014年5月17日、関西大学において開催された、第42回日本ホプキンス協会連絡総会での発表内容に、加筆修正したものである。)

日本警察小史

松尾庄一

はじめに

慶応3年のいわゆる王政復古のクーデタと、それに続く戊辰戦争によって幕府が倒され、新政府が成立した。この過程を明治維新というが、紛争後国家として明治の日本は出発した。制度の構築に当たっては、先進国のキャッチアップの手法がとられた。警察制度も例外でなく、数次の欧州調査団派遣、ドイツプロシアのヘルン警察大尉招聘等により、欧州諸国の制度を日本に合う形に修正し、試行錯誤の結果、明治30年ごろに近代的な警察＝開化警察の体制と任務が固まった。

その後も政治、社会、経済等の変化に応じて警察も変遷することになるが、紙幅の関係もあり、戦後の警察誕生までの歴史を概観することにする。

民衆警察の時代

日露戦争後は、資本家・労働者、地主・小作人関係等の矛盾・対抗関係が進んだだけでなく、都市騒動が噴出し、社会運動が高揚した。これらに輪をかけたのが、デモクラシー、社会主義思想等の外国の思潮の流入であった。このように民衆を抜きには考えられなくなった時代の警察を民衆警察と呼ぶことにする。

この時代は次第に政党内閣制が確立していくときでもあり、警察行政においても時の政権与党の意向を無視できなくなった。内閣の交代ごとに警保局長、警視総監だけでなく、知事、警察部長、警察署長の異動が行われた。

特に、明治38年の日比谷焼打ち事件は、政党と警察の関係を大きく変えた。事件の根底には民衆の警察に対する反発、反警察感情があり、それが警視庁廃止論となって帝国議会で取り上げられた。これに対して時の内相であった原敬は議会対策を駆使し、「警視庁制度を改革し、かつ、警察行政の方法を改良する」と断言して、議会における警視庁廃止の請願や建議を否決する一方、警察に対しては、明治初年以來続いた、国事警察である高等警察に関する警視総監と首相との直結制を廃止し、また、警視庁の部長のほとんどを更迭し、実績等が悪い署長を免官ないし休職の処分に付すなど大なたを振るった。

また、国際協調の流れの中で社会主義者に対する態度や労働者のデモヤストへの対応は微温的にならざるを得なかった。さらに、大正デモクラシーの機運の中で警察においても民衆に基礎を置いた活動の重要性が認識された。工場法の制定、社会政策の強化等もその表れであり、組織においては、工場課、人事相談課等の設置は警察をある程度民衆に接近させようとするものであった。

その際、国民と警察の相互理解の重要性が強調された。前提条件として、国民側には「自治

的精神が足りず、公民として未熟」、「警察に対して過を責めるのみで、自ら協力する姿勢がない」等があり、警察側には「民衆への愛情が足りない」、「権力を笠に着て傲慢」等があったことから、自発的な相互理解は望みがたく、警察による民衆の組織化が全国的に進められた。国民が自警自衛の念を篤くし、さまざまな任意団体が警察と協力して治安を維持することを助成したり、社会政策的事業を行うに当たって地域の教育家、町村長の有力者と連携したりすることが求められた。

統治体制のゆらぎ

警察の民衆化の動きは「民衆警察の形式に随し、人民にへつらい、執行力を弱くしている」と内部から批判された。水野内相は大正 12 年 6 月の警察部長会議で、「警察は力である、警察力が完全で鞏固であって初めて国家の治安を維持し、秩序を保つことができる」と述べた。このような強い警察志向の背景には統治体制のゆらぎがあった。

この時代の指導思想であった民本主義については、警察では「民本主義の特長である民意の尊重を徹底すると議会中心主義になるが、これは極論すれば主権在民であり、国体に反する。」ととらえられた。明治 41 年、赤旗事件が起きると、元老の山県有朋は欧州における君主制の危機の波及をとらえ、西園寺内閣の微温的な社会主義対策が不完全なことを明治天皇に上奏した。これに対し、原内相が「鎮圧圧迫一本やりでは社会主義思想の伝播を食い止めることはできない。教育、社会改良、取締の三者相まって効果を挙げうる」と上奏し、天皇の諒解を求めた。

しかし、43 年 5 月に大逆事件が発生すると、共産主義、社会主義等の各種社会運動の取締りを任務とする特別高等警察（特高）が強化された。特高は、大正時代を通じて社会運動や普選運動の高揚に対抗した。

その後も海外にあっては、ロシア革命や被抑圧民族の抵抗運動、国内にあっては労働運動の高揚によって、国内の社会主義運動が活発化した。山県は社会主義思想の浸透によって国内社会が動揺し、天皇制がゆらぐことをおそれた。そのために、民衆が蜂起するのを防ぐために原首相と協同して、社会主義宣伝等を取り締まる「過激社会運動取締法」の制定や国民教育を通して間接侵略に対抗できる国民を作り出そうとした。この法案は議会を通過しなかったが、3年後の大正 14 年に治安維持法が制定された。治安維持法は、国体の変革、私有財産制度を否認する目的を持つ結社の禁止、その他一連の革命的活動を取締るものであった。

国防警察の時代

関東大震災の影響で国力が落ちているところに昭和恐慌が襲い、世情は荒廃して労資間の紛争、地主と小作人の争議も増加し、都市の風紀も乱れた。凶悪犯罪の増加や右翼の暴挙に対して警察の取締りが甘いとの批判が出た。これらに対しては、刑事警察刷新強化策や国体擁護等の種々の美名の下に私欲を逞らうとする国粹主義者等の取締強化策が採られた。

この時代の特徴として、第一次世界大戦を契機とした「総力戦体制の準備」と国際情勢の激変が警察のあり方を変えたことがある。昭和 5 年前後から、国家の総力戦体制の準備は着々と進んだ。警察もその重要なプレーヤーとなった。昭和 11 年の二・二六事件はこの動きを加速し

た。庶政刷新それに引き続く新体制運動、経済統制、産業構造の変革、精神総動員等の施策が強力に進められた。

新体制下では、思想上、経済上の混乱を防止することが治安維持の内容とされた。そのため、警察は政治経済の運営を戦時体制確立の方向に誤りなく推進するように国民動員の指導取締、統制経済の着実な実施を義務付けられ、戦争が始まると、警察は国防のために存在することとなった。この時代の警察を「国防警察」と称することにする。

国防警察の内容

昭和2年に、思想は思想をもって取締るべしという説への批判として、警保局幹部は「法律の道義性が思想を指導するのも事実」と主張した。ナチスドイツで民族精神が法律の指導精神とされたように、司法・警察の世界でも道義性や善悪が要素となった。翌3年には共産党一斉検挙を契機として特高の認識が高まり、予算も増額され、各県に特高課が置かれた。

7年の五・一五事件で政党内閣制が終わると警察は政党の影響から解放され、政党対策という従来の役目がなくなったことから、10年、警保局や府県警察の高等課は廃止された。しかし、それは高等警察の意義がなくなったからではなかった。高等課という一部局でやる仕事でなく、警察全体でやる仕事となったのである。また、13年の人民戦線事件を契機に、共産主義や社会主義だけでなく、自由主義が特高課の取締りの対象になった。特高警察は取締対象の思想犯罪や組織的犯罪の特性もあり、過酷な取調べが問題になった。

戦時色が濃くなると統制経済の実効をあげるため、13年に経済警察は強化された。これに対して、執行上の困難性を知っていた警察は対応に苦慮した。警保局幹部が「統制経済への警察の参加協力は是非を超越して絶対必要」と危機感を訴え、警保局長が統制諸法令違反が反国家的行為であることを国民に認識させることの重要性を指示した。

国民の警察化として「住民自警」が強調された。14年には警防団令によって消防組が解散して各警察署単位の警防団に編成替えされ、地域の防空・防火活動と治安維持の担い手となっていく。15年には内務省訓令によって全国的に生活に密着した互助組織として町内会・部落会等の整備が図られ、相互監視体制を作り上げ、防空、防火、防犯活動に住民を動員した。また、配給実施等の担い手となった。

民衆保護については、新体制下では、出征兵士の留守家族、経済統制のために困り果てた人に優しい言葉をかける「時代的感覚」を持ち、「民衆的な心」を抱くように要望された。

警察精神の発揮

昭和初年に左右両翼から異口同音に「警察は資本家や政党の番犬、手先」と批判されたこともあり、1930年代になると、警察のなかにも政党や大資本の影響を排除する動きが出、「一党一派の警察官」ではなく、「天皇陛下の警察官」を作り上げようとする警察精神作興運動が大々的に展開された。

日中戦争も泥沼化し、非常時意識が高まると、警察官は国防国家と大東亜新秩序の達成のため

に猛進することを求められた。特に、警察官も軍人と同じように常に有事に備え、犠牲心を充実し、職務遂行においては「国家強権をもって世運進展の秩序と健全性を損なう公害を防遏芟除する」こととされた。具体的には、精神総動員、経済統制等の国家総動員体制の運用面で前面に立たされた。

おわりに

戦後、占領軍の下で戦前警察の特質であった中央集権性は否定され、また、国防警察のイデオロギーであった「天皇陛下の警察官」の元になった官吏服務規律が改正され、「天皇陛下に忠順な」警察官から「国民全体の奉仕者としての警察官」、即ち国民のための警察官になった。一方で、すべての警察は公安委員会の管理の下に置かれ、内閣はもとより知事等の地方公共団体の長からの一定の独立が保証された。また、日本国憲法が公布されると、これまで便宜的に解されてきた国民の自由と権利について警察官は尊重義務を負ったことなどにより、法に支配される「民主警察」になって新たに出発したが、民主警察の行方については、別の機会に論じることとしたい。

国際人嘉納治五郎と揮毫に見る人生観

和田孫博

以前にも書いたことがあるが、私の母校でもあり勤務先でもある灘中学校・高等学校は、灘五郷の酒造メーカーが母体である。昭和の初めに私立中学校を開設するにあたって、その酒造家の親戚で教育者として名を馳せていた嘉納治五郎に顧問を依頼した。嘉納は自分でも理想の学校を創ろうという夢を抱きながら果たせずにいたところ出身地から依頼があったので、二つ返事で承諾し、四半世紀にわたって校長を務めた東京高等師範学校時代の愛弟子の一人を校長に招聘するとともに、何度も現地に足を運び、自らが唱道していた「精力善用・自他共栄」という言葉を建学の精神として授けた。創立より八十六年経った今も、この精神を受け継ぎ、その涵養こそが本校の教育目的の根本である。

嘉納治五郎の生家は、摂津国御影村、現在の地名で言えば、神戸市東灘区御影の浜側にあった。現在はその南側に埋立地が出来ているが、当時はすぐ瀬戸内海に面していたと思われる。本校の母体である菊正宗酒造を営む嘉納本家の分家筋に当たり、江戸時代は酒造と廻船を生業にしていた家だが、治五郎の父親の嘉納次郎作は廻船一本に絞り、幕府廻船方御用達として幕府の海軍とも親交が深かったようだ。軍艦奉行・勝海舟による和田岬の砲台の建造も請け負うなど、勝のパトロンであったという説もある。事実、勝の提案で神戸海軍操練所が置かれたとき、勝はずっと嘉納家に宿泊していた。一八六四年のことであるから、一八六〇年生まれで治五郎も勝のことは記憶に残っていたに違いない。後に勝は、治五郎の姉の嘉納勝子を、長崎海軍伝習所一期生で明治政府で海図作成を受け持った柳樽悦（柳宗悦の父）の三度目の妻として世話している。

明治になり、外国との交易を進めようとする明治新政府に雇われて東京に移った父親について、治五郎は九歳で上京した。欧米との交易を生業とする父親の方針で、烏森の育英義塾で英語とドイツ語を習った。柔道などのスポーツを通じて国際親善に努めた治五郎の生き方には、父、次郎作の生き様が色濃く影響しているのではないと思われる。

治五郎は語学の勉強とともに虚弱体質を改善するために柔術の稽古にも励んだ。官立英語学校を経て官立開成学校に進学（在学中に東京大学に改称された）。文学部で政治学および理財学の学士取得後、選科に進んで道義学と審美学を学んでいる。大学時代に二つの柔術の流派を統合する形で「柔道」を考案。後輩たちとともに嘉納塾と講道館を起こした。おそらくはじめは書生たちの溜まり場の存在であったのだと思う。やがて嘉納は柔道を科学し「柔の形・固の形」という技の型を制定した。そして他の芸能と同じように、段級制度を考案した。闇雲に乱取りするだけでなく、技の型を身につけ、ワンステップずつ上達するごとに段級が上がっていく。これが一般庶民に柔道が普及する決め手となったと言われている。

嘉納は早くから柔道を海外に紹介することに努めている。一八七九年にアメリカ大統領グラントが来日の際、柔術を紹介している。講道館柔道を創始する三年前の話である。また、熊本の第

五高等学校長時代には、教授として勤めていた小泉八雲にも柔道を紹介したようで、八雲は一八九五年にアメリカの出版社から出した“Out of the East”（『東の国から』）の中で柔術論を展開している。嘉納は一八八九年に宮内省御用掛として一年間ヨーロッパに留学するが、その期間にも積極的に柔道を普及した。そのためヨーロッパでは嘉納が日本のスポーツを代表する人物と見られるようになった。一九〇九年にアジア初の国際オリンピック委員に就任するよう要請されたのだが、それは、日本のスポーツが世界的に評価されたというより、欧米だけのオリンピックを世界的なものにしようという企てにおいて、ロシアとの戦争を五分以上に戦いアジアの盟主となった日本から誰を選ぼうかというとき、ヨーロッパで最も知られていた嘉納治五郎に白羽の矢が立ったというのが実情ではなかろうか。事実、その頃日本には、まだいろいろなスポーツを統括する組織などなかった。嘉納が IOC 委員に選ばれ、ストックホルムでの第五回オリンピックに日本選手団を送るよう要請された二年後になって、やっとオリンピック競技大会参加の母体として大日本体育協会が設立され、初代会長には嘉納が就任している。まさに泥縄であったと言えるだろう。

嘉納はその後も欧米やアジアで精力的に柔道の普及に努めている。一九二〇年のアントワープオリンピックに臨席の帰路、ロンドン武道会を訪問し指導と講演を行い、ロサンゼルスにも立ち寄って講演している。それがやがては一九四〇年の東京オリンピック招致に繋がったのであろう。一九三八年、二年後の東京オリンピック開催を確認するカイロでの IOC 委員会に出席した帰り氷川丸船上で肺炎で亡くなるまで、嘉納は日本の柔道を含むすべてのスポーツの国際化に尽力を続けた。彼の死の直後、日本政府はオリンピック開催権を返上し、やがて世界は再びの大戦に、そして日本も孤立と無謀な戦争への道を辿ったのである。

嘉納は若い頃から各地で揮毫している。講道館発行の『嘉納治五郎』によると、額として全国各地に残るものだけでも二百二十六面あるそうだ。本校には開校時に頂いた「精力善用」「自他共栄」の扁額が、楷書と行草交じりのそれぞれ二枚ずつあり、楷書のは講堂に、行草のは柔道場にそれぞれ掛けてある。「精力善用・自他共栄」は、一九九二年の講道館文化会創立に合わせて、講道館柔道の精神を表すものとして嘉納が立言した言葉である。それ以前には「柔能制剛」（柔よく剛を制す）や「順道制勝」（道によりて勝ちを制す）など勝負のあやに関する言葉が多いが、ここに至り、「自らの精力を最善活用し、互いに助け合い譲り合うことによって共に栄える」という自己修練と他者との共存共栄とが柔道の目指すところであることを宣言するわけである。そしてこの精神は柔道に限らず、教育を含む世の中のすべての活動において重要な指針となることを嘉納は各地の講演で語っている。本校の開校を手伝うにあたりこの言葉を校是にするよう求めたのもその最中のことであった。

三年ほど前、初代校長のお孫さんの一人から、「嘉納治五郎が校長とその家族のために揮毫した書が紙のまま巻かれて残っているのだが、自分たちにはあまり意味がないので学校に寄贈したい」という申し出があった。そこで有り難く頂戴し、今年の校舎増改築完成に合わせて表装することとした。ひとつは条幅版で、「盡己^ま埃成」（己を尽くして成を埃つ）で、雅号は帰一齋となっているから晩年七十歳以上のものである。この額は新しくなった校長室に自戒を込めて掛けてあ

る。もう一つは全紙五枚組のでっかいもので、巻いているのを開いてみるにも机の上では到底収まらず、柔道場の畳の上に広げてやっと全貌がつかめるといふ大きさであった。五枚の並べ方にも頭を悩ませたが、国語の教員たちの知恵も借りた結果、「志於善 由於正 勉於成 是處世之要」(善に志し 正により 成に勉む これ處世の要)であるということになった。「よい志を持ち、正しいやり方で、成功に向けて努力する、それが人が生きていく上で一番大切だ」というような意味の處世術であろう。それぞれ一枚ずつを軸にしても額にしても掛けにくいので、表具屋さんに相談した結果、屏風にするのが一番見栄えがするだろうということになった。応接室に毛氈を敷き、その上に飾ってあり、来客が目にして感嘆するのを楽しんでいる。雅号は進平齋となっているから、六十歳代の書である。

最後に、これは本校に遺されているわけではないのだが、教育者としての嘉納の心意気を示すものとして最も有名な言葉を紹介しておきたい。それは「教育事天下莫偉焉一人徳教廣加萬人一世化育遠及百世 教育事天下莫樂焉陶鑄英才兼善天下其身雖亡餘薫永存」である。書き下すと「教育のこと、天下これより偉なるはなし、一人の徳教、広く万人に加わり、一世の化育、遠く百世に及ぶ。教育のこと、天下にこれより楽しきものはなし、英才を陶鑄して兼ねて天下を善くす、その身亡ぶといえども余薫とこしえに存す」となるのか。教育の醍醐味をみごとに表している。自らの影響が自分が死んだ後も百世に亘って残るのだと思えば、いささか武者震いを覚えるのは私だけだろうか。教職に身を置く者として常に心に留めておきたいと思っている。

参考図書・文献

- ・『嘉納治五郎伝』横山健堂著 (一九四一年 講道館)
- ・『嘉納治五郎』嘉納先生伝記編纂会編 (一九六四年 布井書店)
- ・『嘉納治五郎 私の生涯と柔道』嘉納治五郎著 (一九九七年 日本図書センター)
- ・『気概と行動の教育者 嘉納治五郎』生誕一五〇周年記念出版委員会 (二〇一一年 筑波大学出版会)
- ・嘉納治五郎記念国際スポーツ研究交流センター パンフレット
- ・「クーベルタンから見た嘉納治五郎」和田浩一 (二〇〇七年 日本体育学会本部企画シンポジウム発表資料)

◇編集後記◇

『とい 2013』にも、おなじみのカルテットの登場となった◇心揺さぶる松崎の、透徹したヴィオロンには、友を失った悲しみと友の仕事に対する敬意があふれている◆期せずして、楠瀬のフィドルも「生と死」というモチーフを、しかし高揚感を持って、評釈することとなった◆このところ、古代を逍遥していた松尾の歴史探訪のヴィオラは、明治大正昭和の警察を淡々と展望する◆グローバル人材を求める声が、かまびすしい時代となったが、和田のやすらぎのチェロは、真の国際人発見のよろこびを奏でる◇遅ればせながら、33号を発売できるよろこびに勝るものはない。ねがわくば、『とい』に、にぎわいあらんことを。
<<>

編集・発行： グループ帆（代表 / 松崎 一平）

〒930-8555 富山市五福 3190

富山大学人文学部内人間学（松崎）研究室